

別記様式第6

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	張 貴生
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 日本文学の中国語訳及びその諸問題の研究 —三島由紀夫の作品を中心に—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授 佐藤 利行		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授 溝淵 園子		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授 今林 修		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	首都師範大学・教授 李 均洋		
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、日本文学作品の中国語訳について三島由紀夫の作品を中心として取り上げ、その問題点を明確にし、適切な訳出の方法を見出そうとするものである。論文は、第一章「研究の目的とその方法」、第二章「翻訳論と文学翻訳論」、第三章「日本文学の中国語訳の史的考察」、第四章「三島由紀夫文学の中国語訳とその受容について」、第五章『金閣寺』における「もの」の中国語訳諸問題—唐月梅訳のテキストを中心として—、第六章「現代日本文学翻訳の評価紹介と今後の課題」の全六章から構成されている。</p> <p>第一章では、本研究の動機・目的を論じ、研究の方法、すなわち起点テキストと目的テキストとの対比分析という方法により、中国語に翻訳された三島由紀夫の作品に彼の思想、言語表現技巧などが十分に表出されているか否か、また作品の受容と翻訳のプロセスについて述べる。</p> <p>第二章では、翻訳論に関する先行研究についての整理・分析を行っている。一般的な翻訳および文学翻訳について旧来の翻訳理論を当てはめることが妥当であるのか否か、また時代的特徴や社会的な価値観、更には作品に込められた思想や個性をいかに翻訳に反映させるのか、という問題について述べ、翻訳文学には訳者に与えられた再創作の余地があるという筆者なりの定義を行っている。</p> <p>第三章では、前章で取り上げた旧来の翻訳論のうち、巖復 (1853~1921) が提唱した「信・達・雅」(内容に忠実であること、言葉を分かり易くすること、上品で典雅な文章にすること)、魯迅 (1881~1936) の言う「易解・豊姿」(分かり易くすること、原作の容姿を保つこと)、陳西滢 (1896~1966) の「形似・意似・神似」について述べる。さらに「清朝末期から民国初期まで (1899~1919)」、「1920年代から1930年代 (1920~1936)」、「戦争時期 (1937~1949)」、「建国後 (1949~1978)」、「改革開放後 (1979~)」の各時期における日本文学作品の中国語翻訳についての史的考察を行っている。</p>			

第四章では、三島由紀夫文学作品の中国語訳とその受容について考察する。三島由紀夫文学が中国で紹介され、翻訳された時期や背景を述べ、作品の受容のプロセスを詳細に論じ、中国の政治的影響を受けた三島文学の評価や中国人読者に及ぼした影響についても述べている。

第五章では、三島由紀夫の『金閣寺』を取り上げ、中国で広く読まれている唐月梅訳の『金閣寺』（作家出版社、1995年）における「もの」という語に着目し、丁寧な分析を行っている。いわゆる形式名詞として使用されている「もの」の82例について、それらの全てにおいて翻訳としての妥当性を検討している。殆どの日本語の「もの」は中国語の「東西」として翻訳されているが、筆者は唐月梅訳の不適切な箇所を指摘するのみならず、筆者なりの新訳を提案している。こうした過程によって、『金閣寺』に見られる「もの」の訳出法を再検討し不自然な訳にならないための翻訳のあり方を提案する。

第六章では、本論文のまとめと現在における日本文学作品の中国語翻訳の問題点を指摘し、本研究の過程で明らかになった課題などについて述べる。

以上述べたように、本論文は日本文学の中国語訳という大きな課題に対して主として三島由紀夫の作品を中心として考察したものである。『金閣寺』における「もの」の翻訳に関する丁寧な論考は高く評価でき、これを切り口として新たな文学翻訳の研究に発展させることが期待される。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)